家庭でも，対話を通した学びを

副校長　　斉　藤　　誠

私が普段教室を回って授業を見ていると，次のような話が聞こえてくることがあります。

「どうしてその式なのか，〇〇くんの考えが分かる人はいますか？」

「友達の考えのよいところはどこだろう？」

こうした教師からの問い掛けを受け，子供たちは，友達の発表の意図や根拠は何かを考え，意見交流をしながら友達の着想や考える手順等を学び，自分の力として取り入れていきます。

さて，このような問い掛けは，御家庭でもあるのではないでしょうか。

「どうして，お肉で焦げたフライパンにスープを入れて，ヘラでこすっているの？」

「どうして，今日もカレーライスなの？」

まあ，このままの質問が出てくることは，そう多くはないと思いますが，お子様からの質問に，皆様はどのように答えていますか。

「お肉の旨みをこそげ落とすことで，うまみのもとが，スープに溶け出すからだよ。」

「昨日より美味しくなっているからだよ。」

と，すぐに答えを返すことが多いでしょうか。

それとも，次のように

「こすると，焦げた部分がスープに溶けていいことがあるんだけど，どんないいことがあると思う？」

「昨日のカレーと今日のカレーでは，何か違うんだけど，何が違うと思う？」

と，お子様が正解にたどり着けるような質問を返し，対話しながら正解を発見させてあげているでしょうか。

「子どもが『やる気』になる質問」（著：マツダ　ミヒロ，本間　正人）という本の中に，次のような言葉があります。

親としては，ちょっといただけないなぁと感じるような答えがあるかもしれません。そんなときでも，

「そうだよね」

*と，まず受けとめて*いただきたいのです。

もちろん，もっと考えてほしいときや，考えを修正してほしい，と思うこともあるでしょう。そんなときでも，親のイメージする答えを押し付けるのではなく，別の質問を投げかけて，さらに考えてもらう方向に導くのがベターです。

（※下線は斉藤が付記）

冒頭で紹介した授業でも，子供たちから「なぜ？」「どうして？」と質問が出た後，すぐに答えを教えるのではなく，考えるための視点を示唆しながら子供に問い掛け，対話の中で，子供が自ら（必要に応じて友達と話し合いながら）正解にたどり着けるよう工夫しています。

忙しい中で，子供から質問があっても，ついつい「あとでね」と後回しにしたまま，子供が発した「知りたい」「学びたい」という意欲の現れである質問を放置し，主体的に学ぶ機会を逸してしまうことがあります。これは，我々教師も，やってしまいがちですので，肝に銘じる必要があると思っていますが，御家庭でも，対話を通した学びの機会があることで，「考えることって楽しい！」と思えるお子さんを増やしていきたいですね。